

パネルディスカッション

五輪後の新時代に求められる
ROESGによる価値創造

《パネリスト（五十音順）》

内 誠一郎

(MSCI INC.
マネージング・ディレクター)

山 名 昌 衛

(コニカミノルタ株式会社
代表執行役社長 兼 CEO)

スコット・キャロン

(いちごアセットマネジメント株式会社)
代表取締役社長

■司会者

柳 良 平

(エーザイ株式会社 専務執行役CFO 兼
早稲田大学大学院会計研究科客員教授)

目

1. はじめに
2. 会社紹介とESGの考え方
3. 企業のESG活動への取組みと投資家からのエンゲージメント

次

4. ESG評価機関の課題
5. ROESGの実現に向けてアナリストに期待すること

1. はじめに

柳 平成の30年間（1989～2019年）を振り返ると、バブル崩壊後、株式持ち合いの解消が進み、いわゆる「銀行ガバナンス」から「株主ガバナンス」へと変遷した。そして、08年にリーマンショックが起きて、株主だけでなく全てのステークホルダーへの配慮が必要とされるようになった。最近では、急速にESG投資が拡大している。日本でもESGブームの様相になっているが、わが国企

業にESGによる企業価値の創造は本当にあるのだろうか。

この環境・社会・統治というESGは「Everyone So Good」とも言い換えることができる。共通善、すなわち、「皆にとって良いことをやるべきだ」と言えよう。Everyoneには、顧客、従業員、社会に加え、投資家、アナリスト、株主も含まれるべきである。2020年東京オリンピック後の新時代は、ESGと企業価値を両立して、Win-Winのサステナブルな成長を図る時代になってくるだろ